
DVと子ども虐待のソーシャルワーク 実践を変える視点と方法

増井香名子著

日本評論社, A5判 248頁, 2,640円, 2024年11月刊

(東京都小平児童相談所) 茂 晃久

ドメスティック・バイオレンス (DV) から連想するものに、2024年に改正された「配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律」(DV法)と、船戸(2020)の著書を挙げる読者は多いだろう。DV法は2001年の施行後、改正を重ね2024年の改正では「生命・身体」に対する重大な危害を受けるおそれ、から「生命・心身」に改正され、さらに「自由、名誉、財産に対する脅迫を受けた者」が追加され、対象者の拡大などが図られたが、評者は法整備の遅さを嘆いた。船戸(2020)の著書ではDVの孤立化・無力化の過程、その「被害」親や子どもへの影響の甚大さに評者は憤り、慄いた。本書はこのような評者の感情を包摂し、DVと向き合う知識と術を与えてくれる。著者の言葉でいうと「メガネ」と「引き出し」である。

本書は著者の現場での経験やこれまでの研究を踏まえて編まれており、引用文献には多数の筆者の文献が挙げられ、一貫してDVの問題に取り組んできた熱意と努力と使命が感じられる。本書の構成は、パートⅠ「DV支配の本質的理解」(第1章～第8章)では強圧的コントロールを中核とする支配のメカニズム、被害者の体験とその支援について、パートⅡ「子ども虐待とDVの交差に介入する」(第9章～第15章)ではDVがある家庭で子どもを守ることが主眼におき、親としてのDV被害者・加害者への関わりについて書かれている。また、序章を含め全16章すべてが副題にある「実践を変える視点と方法」へと集約されている。評者が印象に残ったのは、序章で事例の提示がなされ、要所でその事例を展開させながら実践する視点と方法が示されており筆者の工夫が見て取れる点である。第3章「どのような状況の被害者に会おうのか」では、物理的ステージ(被害者の生活の場)と心理的ステージ(加害者との離別に関する被害者の意思)との関係から「被

害者」の現状を把握し、さらに先のステージを見据えた具体的な支援が書かれている。このような図式化は支援の地図となり、「被害者」にとっては自身の位置を知り、行き先を見通せる道具となるだろう。第9章「現状からのパラダイムシフトに向けて」では、「被害」親の離別を決断できず、子どもを「被害」から守ることができていない状況を「守ることの失敗 (Failure to Protect)」として捉えるという考え方を転換し、「被害」親の力を回復させ、「加害」親の責任を明確にする支援方法を提示している。

本書は「実践」者のための良書であり、読了後さっそく関係する実践者に薦めた。本書がさらなる実践書になるために今後、「実践」につきまとう一筋縄ではいかない困難さなど、DVにおける「実際」について筆者の現場での「実践」経験から論じられることで、さらに厚みが加わると感じた。楽しみに待ちたい。

文 献

船戸優里 (2020) 結愛へ一目黒区虐待死事件 母の獄中手記. 小学館.
